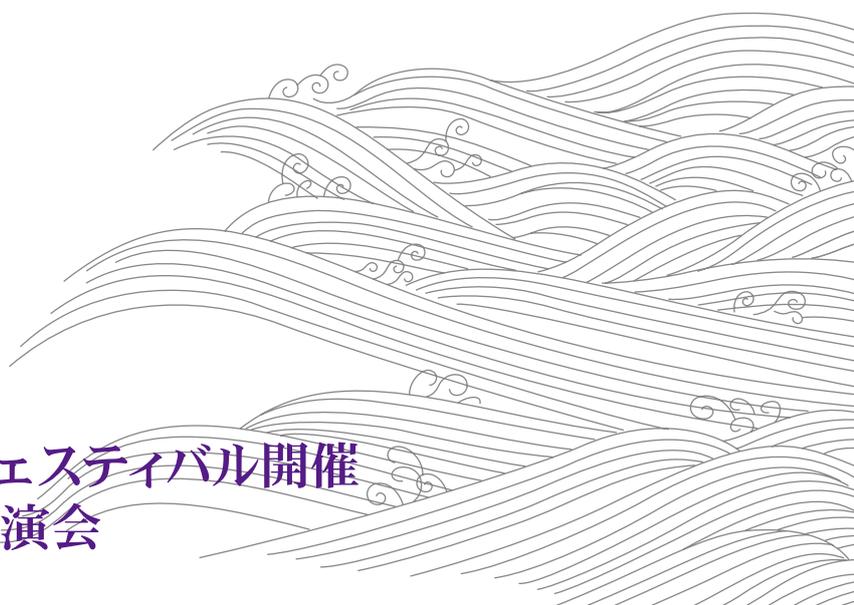


# 茗溪



## 特集

- 第16回茗溪・筑波グランドフェスティバル開催
- 各地の茗溪会が主催する講演会

グラビア	01
特集Ⅰ 第16回 茗溪・筑波	
グランドフェスティバル開催	02
特集Ⅱ 各地の茗溪会が主催する講演会	07
茗溪会の公開講座から 本部主催の連続講座	12
茗溪会は一般社団法人として新発足しました	13
平成24年度 一般社団法人茗溪会 代議員一覧	13
平成24年度 一般社団法人茗溪会	
公益、共益、広報事業等の年間計画について	14
第11回「顕彰」候補者の推薦依頼について	14
新法人移行にともなう	
茗溪会「支部」の呼称について	15
会費は、社会人になって4年目から	
茗溪会の新しい会費制度	15
平成23年度 筑波大学芸術賞、茗溪会賞決まる	16
茗溪学園だより	17
第27回 教職受験対策研修会から	18
桐の葉のつどい	19
季刊誌「茗溪」などを確実にお届けしたい！	20
追悼録	21
「桐の葉のつどい」の掲載について	21
著書紹介の掲載について	21
本部だより	22
編集後記	22

meikei

春  
2012  
No.1073

茗溪会は4月1日から「一般社団法人」として新発足しました！



新井達郎氏 西野虎之介氏 清水一彦氏

第16回  
茗溪・筑波グランド  
フェスティバル開催  
P.2〜6参照



挨拶する江田昌佑大会参与



平成23年度  
茗溪会賞3作品

P.16 参照



paper ∞ IV・内藤 遥 構成

↑ 麒麟を喰らう象・樋口健介 洋画

↓ つくば俯瞰図・清水総二 洋画



# 第16回 茗溪・筑波 グランドフェスティバル開催

日時：平成24年1月21日(土) 午後1時30分～  
場所：筑波大学大会館 レストランプラザ

## 茗溪・筑波グランドフェスティバルのはじまり

現在、年に一度、筑波で開催されている「茗溪・筑波グランドフェスティバル」は今年で16回を数える。2012(平成24)年4月1日に「一般社団法人 茗溪会」として新たに出発する本会にとって、筑波大学との連携はより一層重要になってきている。

本会の会員の%以上を筑波大学卒業生が占める現在、筑波にいる会員・筑波大学生が中心になって準備・運営にあたっている「茗溪・筑波グランドフェスティバル」のこれまでを振り返り、茗溪会と筑波大学の結び付きがさらに強まることを願って、特集記事を組んだ。

第1回の「茗溪・筑波グランドフェスティバル」は平成8年1月6日に上野「東天紅」に於いて「オール茗溪人・筑波大学教職員・学生大集合」と銘打って開催された。

「参加者は準備・運営に加わった者を加えて300人を越えた。参加者の半数は学生であった。会は筑波大学を平成5年に卒業してプロのアナウンサーになった人と学生の



第一回茗溪・筑波グランドフェスティバルの会場風景

の進行係ですすめられ、江崎玲於奈大会会長や茗溪会足立原茂徳理事長の挨拶に続き、柔道の猪熊功氏(35教大体系)や体操の小野清子氏(33教大体系)のスピーチ、現役学生の歌や応援団の演舞等も披露され、最後に全員が肩を組んで「宣揚歌」を歌って茗溪会員も筑波大学生も一層の連帯感を生み出した」と実行委員長の中村良三氏(40教大体系)は季刊誌「茗溪」の1009号に書

いておられる。

その後、第2回から「茗溪・筑波グランドフェスティバル」と名を改め、第3回から第7回までは東京で開催され、「茗溪会館」が会場となった。

## 東京・筑波交互開催から連続して筑波での開催に

2004年の「第8回茗溪・筑波グランドフェスティバル」は、はじめて筑波で開催された。大会会長は北原保雄学長(35教大体系) 実行委員長は向嶋成美氏(40教大体系)で、主な内容は「Tsukuba Biz Live 2004」挑戦する企業トップに学ぶ「人を育てる」現場からの熱き鼓動」であった。

2004年の4月には国立大学法人法により「国立大学法人筑波大学」が設置され、翌年の2005年には大塚の茗溪会館等で「第9回茗溪・筑波グランドフェスティバル」が開催された。大会会長は岩崎洋一学長、実行委員長は吉田章氏(45教大体系 47院修体)であった。

2006年の「第10回茗溪・筑波グランドフェスティバル」は筑波で二度目の開催となった。「卒業生には最近の新しい筑波大学の姿を是非体験していただこう。現役の学生の皆さんには、もつと社会とのパイプを広げてもらおう。」との構想で企画された大会の会長と実行委員長は、共に昨年の岩崎洋一学長・吉田章氏が引き続き勤めた。前年の8月に「つくばエクスプレス」が開通したこともあり、筑波大学への交通の便はかなり良くなり参加しやすくなった。プログラムでは学内研究施設見学ツアーが組まれ、在席する学生ですらよく知らない最先端の研究に触れることができた。メインのプログラムはシンポジウム「つくばで働く」と講演会「アイディアの構造」であった。

2007年の「第11回茗溪・グランドフェスティバル」が大塚で、2008年の「第12回茗溪・グランドフェスティバル」が筑波で開催された後の2009年の「第13回茗溪・筑波グランドフェスティバル」は、新しい発展を期して筑波で開催された。これは新たに建設された「総合交流会館」も会場として活用できるようになった



大会テーマ「醸」

空の寒い1日でしたが、当日の参加者は、在学生、同窓生、教職員など

1月21日は曇り空の寒い1日でしたが、当日の参加者は、在学生、同窓生、教職員など

このグラウンドフェスティバルを核にして、共に楽しみ協力するための同窓会組織として発展させていけることを考えて、茗溪会と筑波大学および関連する方々の想いを、このテーマの文字に込めました。

茗溪・筑波グラウンドフェスティバルは今回で第16回を数え、2012年1月21日(土)に筑波大学学生会館で開催されました。

茗溪会と筑波大学との共催として開催することになって3回目の開催になりました。

筑波大学の在学生、卒業生、修了生、教職員、東京教育大学をはじめとする前身校の卒業生、修了生の皆さんが、交流を深める良い機会になるよう学生を中心に、大学本部の須藤さん、福居さん他実行委員の皆さんで議論を進め、企画運営にあたり、当日の学生スタッフにも多大な協力をいただきました。

## 茗溪・筑波グラウンドフェスティバルと 題字「醸」

本フェスティバルは、筑波大学と前身の東京教育大学等諸学校・大学の卒業生・修了生等が、世代を超えて交流し、親睦を深め、同窓の輪を拡げることを目指して毎年1月を中心に開催されるようになってきました。

本年度のテーマ字は「醸」、醸す(醸造、醸成の醸)です。人と人との繋がりは瞬間的に形成される場合もありますが、本来、徐々に形成されて本物の繋がりになっていくものであり、そのような場を提供するような意味を込めています。

すなわち、本フェスティバル参加者の大学・同窓会に対する想いを醸成すること(醸すこと)、その題材として、シンポジウム「あなたの知らない醸造の世界」ウィーン・日本酒のプロフェッショナルのお話」を中心に、少し、身近なテーマで、ビジネス、基礎科学の面も含めて基調講演、パネルディスカッションをしていただく企画でした。

## 筑波大学学生会館にて

当日は13時から受付を開始し、13時30分から講堂でオープニングセレモニー、14時からシンポジウムを開催しました。オープニングセレモニーの終了後筑波大学のメッセージソング「IMAGINE THE FUTURE」の合唱がありました。なお、この、メッセージソングは一昨年の第14回茗溪・筑波グラウンドフェスティバルで基調講演して下さった同窓生コピーライター一倉宏氏が作詞されたものです。このことは、茗溪・筑波グラウンドフェスティバルの場が新しい同窓生の絆を醸成する良い機会であったこと示す象徴的な出来事です。

## オープニングセレモニー

オープニングセレモニーでは、最初に、大会会長である山田信博筑波大学学長の代理で清水一彦副学長・理事からご挨拶があり、その後、茗溪会理事長の西野虎之介氏から同窓会を代表してご挨拶をいただき、最後に、実行委員長の新井達郎より企画の説明と支援に対する謝辞を申し上げました。その後西野茗溪会理事長から清水副学長に援助金の贈呈がありました。本フェスティバルの

## 茗溪・筑波 グラウンドフェスティバル 年譜

日程	会場	テーマ	大会 会長	実行 委員長
第1回 1996. 1. 6(土)	上野 東天紅	喝	江崎 玲於奈	中村 良三
第2回 1997. 1.11(土)	上野 東天紅	翔		伊與田 康雄
第3回 1997.12.20(土)	大塚 茗溪会館	和		高橋 伍郎
第4回 1999. 1.10(日)	大塚 茗溪会館	響	北原 保雄	向嶋 成美
第5回 2000. 1.22(土)	大塚 茗溪会館	携		吉田 章
第6回 2002. 2. 3(日)	大塚 茗溪会館等	創		藤原 保明
第7回 2003. 1.13(日)	大塚 茗溪会館等	展	岩崎 洋一	新井 達郎
第8回 2004. 1.26(土)	筑波 大学会館等	朋		山田 信博
第9回 2005. 1.23(土)	大塚 茗溪会館等	究		
第10回 2006. 1.14(土)	筑波 大学会館等	天		
第11回 2007. 1.27(土)	大塚 茗溪会館等	幹		
第12回 2008. 1.26(土)	筑波 大学会館等	繫		
第13回 2009. 1.30(土)	筑波 大学会館等	環		
第14回 2010. 1.30(土)	筑波 大学会館	楽		
第15回 2011. 1.22(土)	筑波 大学会館	想		
第16回 2012. 1.21(土)	筑波 大学会館	醸		

ことや、筑波エクスプレスの利用により、筑波大学での連続開催が可能となったため筑波で開催されることになった。大会会長は岩崎洋一学長、実行委員長は新井達郎氏(56筑博化)であった。

2010年の「第14回茗溪・筑波グラウンドフェスティバル」からは、名実ともに茗溪会と筑波大学の共催となり、2011年、2012年は筑波大学で開催された。今後、この催しを通して、茗溪会と筑波大学の絆が益々深まっていくことが切望される。



実行委員長 新井達郎氏



茗溪会理事長 西野虎之介氏



副学長 清水一彦氏(学長代理)

第1回は中村良三先生を中心に発案され、1996年に東京で、懇親会を主にして、立食パーティー形式で開催され、講演会も含めた懇談に変わりながらも今回第16回を迎えるまで学生諸君の企画力と運営力に支えられ続けてくることができたこと等の紹介がありました。また、長年にわたり茗溪会からの援助金の贈呈や各種支援をいただけてきていることと、茗溪会と筑波大学の共催として開催することになったあとの、大学と茗溪会のご支援についてオープニングセレモニーでも紹介がありました。

### シンポジウム

シンポジウムでは、「あなたの知らない醸造の世界」(ワイン・日本酒のプロフェッショナルのお話)と題して、基調講演とパネルディスカッションを企画しました。基調講演は萩原健一氏(株式会社サドヤ社長)にお願しました。萩原健一氏は、東京教育大学を卒業され、サントリー入社後、カリフォルニア大学留学、サントリー登美の丘ワイナリー、株式会社岩の原葡萄酒代表取締役社長を経て、現在、サドヤ社長をつとめられています。この間、国産ワインコンクール金賞などを受賞されております。萩原氏の基調講演は、「ワインの過去、現在、未来」と題して、甲州ぶどうの起源、ワインづくりの広がり、ワインブームと欧米のワインとの関係やワイン業界の現状、甲州ワインの誕生に向



基調講演 萩原健一氏

親の七光りというのはいくく耳にすることであるが、私の子供の七光りの恩恵に預かっているとおっしゃられて、何のことかと思議な気持ちで話を伺っていたら、水泳で一時代を画して、現在また、復活されて活躍されている萩原智子さんは、萩原さんのお嬢さんであることを話されて、我々も始めて伺ってびっくりした次第でした。萩原氏の基調講演の後には、パネルディスカッションを行いました。パネリストとして萩原氏、内山裕夫氏(筑波大学生命環境系教授)、藤村俊文氏(来福酒造代表取締役)に参加していただき、司会は新井がつとめました。内山氏と藤村氏は、本学のブランド酒である、桐の華の酵母の開発と製品化に携わった方です。3人をパネリストにお願したのは、ワインと日本酒の醸造のプロにそれぞれの魅力、苦労話、楽しみ方、今後の展開などをお話いただき、お酒をいかにたしなむかなども含めた議論をしていただき、懇親会でもそれらの話題で盛り上がっていました。考えもありました。3者3様の専門家がシンポジウムのテーマに関してご自身の体験・仕事・研究を通してお話くださり、また、異なる専門であるにもかかわらず、パネラーの皆さんご協力で、極めて盛り上がったパネルディスカッションになりました。このように、3人のパネリストの方々には、ご自身のこれまでの研究経歴、開発・製造・販売経歴から、周囲の人達との関わりも含めて、お話ししていただき、あつと言う間に時間が過ぎてしまった印象でした。講演後、い

かつた取り組みななどお話しいただき、新しい視点を感じさせていただき、あつと言う間に、講演時間が終わってしまつたという印象を受けました。また、最初に、

会場の参加者の中から、内山プロジェクトに入っていた安ヶ平良人さん(当時は学生・写真右)を司会者が壇上に招いて、桐の花酵母研究当時のことを話してもらった。わかりやすく興味深い話だった。



くつか会場からも質問やご意見をいただきました。また、パネルディスカッションの途中で、内山先生が桐の華の酵母を見つけたときの状況を話された時に、そのプロジェクトに参加されて中心となられた学生さんが会場にいられているとの話でしたので、当時学生さんで、現在就職されている方に壇上に上がっていただき、苦労話を伺うことができました。この方には、突然、お話をお願いしたところ、とても分かりやすく当時のお話をしていただき、このことも含めて、シンポジウムは、会場と一体となった、有意義な時間で聴衆は大いに満足されていたようでした。

# シンポジウムから

萩原さんの基調講演では、ご自身のネクタイの柄の話から入り、いつもコルク栓（ワイン用）の柄の入ったネクタイを着用しているとの話や、お嬢さんの萩原智子さんがオリンピック選手で活躍され、また、現在も現役に復帰され活躍されていることなどから、子の七光りをもじって「コシヒカリの萩原」といわれるなど、話の初めにこのようなことをおっしゃったので、会場の雰囲気はなごやかなまま進んだ。

日本のぶどうの起源については、奈良時代に行基がぶどうを持ち込み甲州ぶどうとして広まったという説と鎌倉時代から一般に広まったという伝説があるそうで、行基がぶどうを持ち込み、鎌倉時代に広まったというように話になっているとのことであった。その後、年は流れて明治政府の殖産興業政策にそってぶどうづくりが盛んになり、さらにワインの製造、欧米との競争に至っている現在の取り組みなどについて話された。例えば、日本はこの40年でワインの消費は約40倍にもなったこと、また、日本のワインも、山梨以外にも名産地があり、気候、風土により、酸味、甘味、風味など、その土地の個性を表すワインづくりが盛んになっていることが話された。

また、熟成度などの話もされ、現在、社長をつとめられているサドヤでは、50年以上熟成した、歴史を背負うワインもあり、それぞれ特有のワインの味わいを楽しめる時代になってきており、日本のワインもその仲間入りができてくるようである。日本人が飲料するワインは約1/3が国産で、2/3がフランス、アメリカなど輸入品であるが、価格、安全性、健康、風味や味に対するこだわりなどで選べるようになって来ている。もう一つ問題点として、日本では1本あたり約9ドル、フランスでは1本当たり2ドルでもワインが購入可能であり、価格や価値についても言及された。また、ワインツーリズムと言って、ワイナリーを訪れ、自然にふれ、直営店でワインを購入し、直売場のレストランでワインを飲むような状

況に変わりつつある。サドヤも、甲府駅の近くにワイナリーがあり、地下のワイン製造場、貯蔵所や年代物のワインの見学、直売、レストランでの飲食なども楽しめることであった。非日常の生活を送ることができるとにもワイナリーを訪れる魅力があるとお話もあり、さらに、国産ワイナリーの特徴など、興味深い講演であった。

その後、萩原さんの他に、内山先生、藤村さんを交えて、パネルディスカッションを行った。

内山先生は環境と微生物に関する研究がご専門で、微生物を用いた環境浄化に関する研究が主力であるが、一部、発酵微生物の研究を行っており、その中で、お酒の酵母に関する研究を行っておられたとのことでした。

藤村さんは、実際に酒造りの現場に関するお話も交えてくださり、例えば、ワイン、日本酒、ビールは酒税法が異なること、新規参入に関すること（ワインは新規参入が可能であるが、日本酒は不可能で、日本酒製造メーカーは、10年前は茨城に65社あったが、現在は50社である）や、現在の茨城県の酒造会社の現状についてもお話があった。

藤村さんは新しい天然酵母を見つけて、特に、花から酵母をとることを中心にして、それを用いて新しい酒をつくることに興味をもたれている。これまで、天然酵母として認められ広く利用されている酵母は日本醸造協会が主導で行っているが、藤村さんは原点に帰って、自然には酵母がたくさんある、特に植物の中で糖分があるところがあり、従って、花のところに酵母があるはずである。このような観点で検討を行っていたところ、桐の花からの酵母を用いることができた。桐の花のほかにも、なでしこなどに挑戦し、今までの酵母と味の違いなど、異なる特徴を有する酵母を見つける試みを行っている。しかし、これらの酵母で、しかも、醸造に適した酵母は少ないとのこと、酵母を見つけても、醸造に利用できるとは限らないとのこと、その桐の花の酵母を見つけたときの状況を内山先生に話していただいた。

内山先生の専門の微生物学は日本では、醸造と密接に関係あり、醸造からはじまるとも言える。従って、微生物

## シンポジウムのパネリスト

写真下：左から新井達郎氏、萩原健一氏  
右ページ写真：左から藤村俊文氏、内山裕夫氏



物を学ぶものは、酒造りを知っていた方がいい。このような理由で、内山先生は最後の授業の時に酒造りの現場見学をお願いしており、来福酒造さんと懇意になり、花から酵母を取り出すプロジェクト、特に筑波大学ゆかりの五三の桐から酵母を抽出し、酒造りを目指すことにした。その結果、筑波大学のお酒、「桐の華」が誕生したとのことであった。

日本酒、ワインの味わい方などに関して、藤村さんは、日本酒に関しても、食中酒で料理の邪魔をしないパランスのいいお酒とその飲み方などに関してもふれたいいただいた。お酒の効用として、せわしい日々の潤滑油としてお酒の活用、飲まず嫌いでではなく、グレードの高い日本酒は必ず気に入ってもらえる、ワインは、日常どのように選んで飲むか、楽しむか、付加価値を大事にして飲むかなど、いろいろ多様なご意見を伺うことができた。会場からのご質問にもお答えいただいたが、皆さん、日本酒とワインの科学と味わい方を中心として議論を通して、楽しんでいただけたようであった。

## 懇親会

懇親会は大学会館において16時30分から開催され、参与の江田昌佑若溪会副理事長のご挨拶につき、阿江通良体育専門学群長のご挨拶があり、また、8名の関係者による鏡開き、東照雄副学長の乾杯などのあと、世代を超えた交流を楽しみました。余興として、筑波大学応援部WINSのパフォーマンスが披露されました。続いて恒例の宣揚歌を応援部WINSの指揮のもと全員で輪になり肩をくみ斉唱し、学生委員と実行委員の紹介、学生委員長の澤勢君の挨拶があり、最後に実行委員長がお礼の挨拶を致しました。筑波大学と同窓会若溪会の発展と来年の再開を約束して散会となりました。

今年も、筑波大学の学生や先生方、若溪会理事の方をはじめとする同窓生や卒業生の方々など、シンポジウムをはじめから、懇親会終了まで多くの方々が帰らずに交流を深められている様子が見受けられ、その意味でも、極めて有意義な会であったと思われまます。世代を超えて交流されていた様子も見受けられました。例年のように懇親会場に学生さんに書いていただいた題字を掛けておりましたが、大変好評でした。



懇親会にて

## あわりに

本フェスティバルは、1年で一番寒い時期に開催されますが、第16回大会も出席者の方々から好評をいただき今後とも発展させて行くように激励をうけました。これもひとえに関係され、陰に陽にご援助ご協力いただきました関係各位のおかげです。

とりわけ、山田信博学長並びに筑波大学本部の皆様方、西野虎之介理事長をはじめとする若溪会本部の皆様方、大学会館の職員の皆様、教職員各位、紫峰会の職員の皆様方からは、物心両面のご援助とご協力をいただきまして、厚く御礼申し上げます。筑波大学と若溪会の共催として本フェスティバルが、益々発展し、同窓生の交流に役立つことを期待しております。また、グラントフェスティバルを筑波大学と同窓生の交流の場としてさらに発展させていくことが出来ますよう、皆様方の一層のご支援をお願い致します。筑波大学の在校生と卒業生、前母校の同窓生がともに語らい、写真を撮り合い、交流を深める場として喜んでご参加いただいていることを目のあたりにして、このような会の継続の意義を改めて認識いたしました。(第16回若溪・筑波グラントフェスティバル 実行委員長 新井達郎)

## 交流の輪の拡がりを



澤勢 一史氏

第16回若溪・筑波グラントフェスティバル(以下MTGF)は2012年1月21日(土)に開催され、多くの方にご参加いただくことができました。誠にありがとうございました。

私は2004年に筑波大学に入学し、その年から今回に至るまで、MTGFに関わり続けてきました。私にとっての初めてのMTGFは、2005年1月に雪のちらつく中開催された第9回大会でした。当日スタッフとし

て参加しましたが右も左も分からず、あつという間に終わってしまったのを覚えています。第10回からは学生委員の一員として、より深くMTGFの運営に携わることになりました。

8年の間に、MTGFを取り巻く状況も大きく変化しました。これまで多数の学生委員と共にMTGFを築いてきましたが、そのほとんどは社会人となり、今は来場者として参加してくれています。また、今大会とこれまでの大会との違いとして、昨年の東日本大震災の影響が挙げられます。例年会場となっている大学会館が使用できなくなるかもしれないという、不安だらけのスタートでした。様々な困難がありました。多くの人の力をお借りし、無事開催までこぎつけることができました。

シンポジウムのテーマ設定・ゲストの選定は、その大会のカラーを決める重要な要素であり、毎年悩むと同時に楽しみでもあります。今回も、実行委員・学生委員全員で案を出し合い、「あなたの知らない醸造の世界」や「ワイン・日本酒のプロフェッショナルのお話」という企画を練り上げました。シンポジウムのゲスト選定の過程は驚きの連続で、今大会の萩原健一氏をはじめ、多くの誇るべき卒業生がいるということを再認識することができました。

これまでのMTGFの活動が実を結んだ例として、筑波大学ブランディングのスローガンである「IMAGINE THE FUTURE」が挙げられます。これは本学の第1期生でコピーライターとして活躍されている一倉宏氏から提供されましたが、その一倉氏には第14回にてシンポジウムゲストを務めていただき、シンポジウム後に行われた懇親会にて山田信博学長と交流されました。

これまでMTGFに携わり続けてこられたのは、また参加したいと言ってくださる来場者の方々がいらっしゃったからです。これまで以上に交流の輪が広がるお手伝いをし、卒業生が筑波大学との繋がりを感ぜられ、帰って来られるようなイベントにしたいと思っています。次回以降も、ぜひともよろしく願っています。

(第16回若溪・筑波グラントフェスティバル学生委員長

澤勢 一史)

# 各地の茗溪会が主催する講演会



近年、全国の地域や職域の茗溪会が主催する文化講演会等の公開講座の開催が、各地で盛んになってきております。

社団法人茗溪会は、この新年度から新たに「一般社団法人茗溪会」としてスタートしました。法人としての姿は変わりますが、各地域・職域における茗溪会の支部活動は、今後とも茗溪会活動を支えるだじな活動であると位置づけております。

各地域・職域の茗溪会支部は、これまで“社会に開かれた活動”、あるいは同窓会らしい“知の還元”の活動として、講演会や研修会を公益事業として活発に行ってまいりました。継続性をもって活動しているところも多く見られます。

そこで、平成23年度に各地域・職域の茗溪会が開催した講演会等の内容について、開催地から詳細をレポートしていただき、まとめて掲載することに致しました。なお、すでに本誌で紹介した講演会等についての報告は省いております。

## 神奈川

神奈川支部は、毎年7月に『茗溪会神奈川支部総会』、12月には『茗溪会管理職等懇親会』を開催しています。「支部総会」と「管理職の会」は、開催月と会場を固定し、同窓が集まりやすい工夫をしております。また、総会開催案内は1000通ほどを発送し、前年度の総会の様子をお知らせするとともに、広く参加を呼びかけています。

今年度、「支部総会」は7月2日(土)に開催され、懇親会では82名の同窓が高らかに『宣揚歌』を歌い上げました。「管理職の会」は12月10日(土)に開催され、新しく管理職になられた方と退任された方の歓送迎を兼ねた懇親会を通して一層の絆を強めました。

神奈川支部では、年2回の講演会を開催していますが、23年度の講演内容は以下のとおりです。

### 世界を目指す日本サッカー



講師 田嶋 幸三氏 (62筑修体)

日本サッカー協会副会長専務理事  
7月2日(土) ローズホテル横浜

「なでしこジャパン」がW杯ドイツ大会で優勝したのは、講演の熱気が残る7月17日だった。講演は、日本サッカー協会(JFA)の組織運営と指導理念が主な内容で、目標を明確にし、指導を組み立てていくことの大切さが強調された。

2015年までに、世界のトップ10の組織となり、サッカーファミリーを50万人(2050年には1000万人)にすることを目標に掲げ(JFA2005宣言)、その実現に向けた取り組みを着実に進めていることが熱く語られた。また、気持ちをロジカルに伝達する力の育成が強調された。サッカーでは個々のプレーに理由が求められる。失敗したら、ミスの実事より、そのプレー(例えば、どういう目的で向こうに蹴ったのか)の意味を問う。サッカーでは、意思を主張しなければ、存在すら認識されない。

目標を明確にした組織運営、そして、行動を意味づけ意思を明快に伝える行動様式と思考様式を日本のサッカーに定着させたいという田嶋氏の思いが熱く深く伝わり、感銘を受けた。

### 教育に『職務倫理』は必要か



講師 鈴木 彰氏 (51教大他)

神奈川県警察本部教育参与  
12月10日(土) ローズホテル横浜

講師は、昨年度まで勤務された教師としての経験と県警本部で新たに得られた体験をもとに講演された。

同じ地方公務員である警察官と公立学校教員(「教員」と略)の職務、そこから派生する指揮監督をめぐる問題が主な内容であった。両者ともに「法令および上司の職務上の命令に従う義務(地公法32条)」はあるが、警察官は「上官の指揮監督を受け、警察の事務を執行する(警察法63条)」に対し、教員は「自己の崇高な使命を深く自覚し、絶えず研究と修養に励み、その職務の遂行に努めなければならない(教基法9条)」と規定されている。警察においては、指揮官としての地位や任務を前提とした指揮監督に拠り、教育においては、指導力、判断力、統率力などの資質に拠るところが大きい。このように、法令等を例示しながら、警察官と教師の職務を対比しながら展開されたリーダーシップ論は、新鮮であり刺激的だった。

文責 神奈川支部 矢野正人(53院修農経)

### 3・11以後の地球環境を考える

講師 小野 有五氏 (47教大地鉱)

北海道大学教授

1月7日(土) 札幌全日空ホテル



茗溪会新春教育講演会は、茗溪会本部より清水進一理事も参加され、約30名の参加のもと、小野有五氏を講師にお迎えして、地質学・環境学の目指すべきもの、地震・津波・原発問題に関する環境学からの見方について講演していただいた。以下その内容を紹介する。

#### 講演の主な内容

東京生まれ東京育ちの小野氏は、山好きが高じて地質に興味を持つようになり、東京教育大学入学後、北海道の地質の研究や水河の研究をし、北海道が好きになった。北大に環境学の博士課程が新設されるのをきっかけとして昭和61年に北海道大学に来ることになった。

今年の3月18日、北大定年の記念講演会で、3月11日の東北大震災の被災者支援のための市民ネットワークを立ち上げることを提案。3月25日から札幌「むすびば」という名称で支援を開始した。現在約1800人の人々が、東北から北海道に逃れてきているが、そのほとんどが若い母親と子供たちである。その方々の支援を主にしている。

支援の中で考えたことは、幸い北海道、特に札幌は地震の被害にあっていないので、東北以後の最大の支援場所となれるはずであるが、近郊に泊原発があり、何かあった場合は東北の二の舞になりかねない。それを防ぐために、7月に「泊原発の廃炉をめざす会」を立ち上げた。25年間の北大での地質学の研究を通じて、研究のためにフィールド・ワークなどを行い、開発を行うことが、逆に自然を壊すことにつながるのではないかというジレンマを感じるようになった。その中で、自然を守ること

の意味を本格的に考えるようになった。

そのような方向性で社会のいろいろな環境現象を見てみると、いろいろな矛盾を意識するようになった。その中で特にダム開発やアイヌ文化の保護や水俣病の問題について市民の側に立つてもの考えることを自分の活動の中心にするようになった。

環境科学の役割は大学と社会を結ぶものと考えている。ただ単に研究が評価されれば良いと考えるのではなく、現実の活動がどう社会に還元されるかを考えなければならぬ。そのような考えの中で水俣病の現実の状態を知ってもらったための水俣展の開催を行った。

水俣病はメチル水銀の流失を確認しながら、それが有毒であるという点において、科学者がはっきりした確証がないという発想をしたため、何も対策を講じてこなかったことが原因で多くの被害者が生まれた。「わからないことを批判する」という発想を科学者が持たないことで、「分析による遅滞」という悲劇が生じる。そうならないためには、疑わしいことはまず止めておくという発想をまずすべきである。

本場の科学とは何かと考えるとき、宮沢賢治の姿勢を見習うべきである。賢治は実際に農民とともに働きながら、彼らが本当に欲することを身をもって体験し、その中で、自分の研究を活かしていった。そのような姿勢を科学者は見習うべきである。

現在、原発の廃炉を目指し、北電を提訴中である。提訴することによって、裁判で色々な資料を提示させ、情報を明らかにすることが、本当の公益にかなうことになると考えている。

つい先日、福島原発は現在冷温停止状態であると政府は発表したが、実際は永久的に冷温停止にできないと考えられる。また、海洋への大量拡散の問題も深刻である。

今回の大地震における津波に関しても、想定外という言葉が盛んに言われていたが、実際は今までにこれくらい津波は歴史の長いチームの中では必ず起きていた。そのことに対しての科学者の警告について、政府や東電は今まで聞き入れることがなかった。

### 平成23年度 支部主催講演会一覧

#### 本部が支援した活動を掲載

地域/職域	日時	演 題	講 師	
奈良	23年7/2	空が青いから白をえらんだのです	寮 美千子	奈良少年刑務所涵養プログラム
愛媛	7/2	茗溪文化講演会	徳 野 涼 子	元プロビーチバレー選手
神奈川	7/2	世界を目指す日本サッカー	田 嶋 幸 三	日本サッカー協会専務理事
静岡	7/3	良品計画の経営改革と海外展開	松 井 忠 三	(株)良品計画会長
筑波大学	7/20	高大連携事業への支援	筑波大学の先生方	
新潟	10/8	茗溪会教員研修会①	星 勉	新潟大学講師
新宿	10/8	各界の茗溪会員の活躍		
橘会	10/9	図書館学校創設90周年記念講演会	阿刀田 高他	作家
芙蓉会	10/16	経営上の話	高 坂 節 三	漢字能力検定協会
山 梨	12/3	筑波大学の新しい挑戦!	清 水 一 彦	筑波大学理事・副学長
		茗溪・筑波大学の故郷～湯島聖堂内陣	守 屋 正 彦	筑波大学教授
神奈川	12/10	教育に「職業倫理」は必要か	鈴 木 彰	神奈川県警本部教育参与
北海道	24年1/7	3.11以後の地球環境を考える	小 野 有 五	北海道大学教授
新潟	2/4	茗溪会教員研修会②	星 勉	新潟大学講師
葛 飾	3/4	食生活力の向上について	白 井 美 佳 他	実践女子短大教授ほか

アメリカでは津波の波高と遡上高の違いを大きく意識し、海岸に福島型の原発は置けないシステムになっている。プレート境界に近い日本の原発は世界の中でも特に危険な原発ということが出来る。泊原発もユーラシアプレート線上にあり、今後、以前奥尻島で起こったような巨大津波が泊原発を襲う可能性が高い。しかし、北電は

泊原発近くに海底活断層がある可能性を認めていない。特に海底活断層は今回の地震により、いくつかの断層がつながることがわかり、危険性がより高まることになった。そのようなことを考えると泊原発は一刻も早く廃炉にすべきである。原発の廃炉というのは、正常な状態で廃炉にしても20年程度かかるが、破壊された後では100年以上の時間がかかる。現在の目先の利益でなく、将来における大きなリスクも考えた上で、原発の廃炉を進めていかなければならない。

文責 北海道支部 柳澤 聡 (01筑二日)

## 静岡

### 良品計画の経営改革と海外展開

講師 松井 忠三氏 (48教大体)

(株)良品計画・代表取締役会長

7月3日(日) 静岡クーパーホール会館

静岡県支部は正会員701名を数え、新しい法人化においては代議員を4名選出いたしました。会員の多くは中高・大学の教育関係者ですが、筑波大学出身者の増加とともに、県庁職員や一般企業、医療関係者等々、職種幅を広げてきています。



静岡市で開催される支部総会をはじめ、浜松市での西部地区会、沼津市での東部地区OB会、高校教員による各教科会等の活動があり、それぞれの会において旧交を温めると

ともに、会員相互の結束を強くしています。

#### 講演会 (平成23年度)

平成23年度の講演会は、7月3日(日)に静岡市・クーパーホール会館(支部総会会場)で開催しました。講師は株式会社良品計画・代表取締役会長の松井忠三氏で、「良品計画の経営改革と海外展開」と題してお話をいただきました。松井氏は昭和48年東京教育大学・体育学部卒業のあと、株式会社西友ストアに入社、平成13年に株式会社良品計画社長となり、現在は代表取締役会長兼執行役員を務められています。

講演の内容をご紹介します。

- ① 会社のプロフィールについて、資本金67億6千6百万円、従業員4908名(うち正社員1253名) 国内369店舗、海外139店舗(ヨーロッパ、東南アジア等)などのご紹介があり、
- ② 主な顧客像としては、30〜40代が半数、女性が4分の3とのこと。
- ③ 無印良品のコンセプトとして、次の二つがあげられました。(1)わけあって安い(素材の見直し、工程の点検、包装の簡略化)、(2)発想の原点「モノしか見えないモノをつくる」

- ④ 過年度経営実績として、順風満帆の成長期(90〜99)の成功の要因、そしてつづく挫折の要因、リストラ、不良在庫の処理、在庫コントロール等々のお話がありました。
- ⑤ これらのお話を踏まえて、経営の改革、海外展開等々のお話をいただきました。

次々に経営の神様の話は続き、スクリーンに映し出されるグラフや写真に私たちは引き込まれていきました。聴衆の多くは教育関係者であり、経営に疎い者たちでありましたが、分かりやすく、分析的な手法で海外進出を果たし、海外売上高400億円というグローバル企業に成長させたお話しは大変興味深いものでした。それは、学校経営等にも通じるものを個人的ながら感じ取ることができました。

講師の松井氏は、体育学部出身という異色に加え、静岡県及び茗溪出身という親しさも醸し出され、和やか

な雰囲気での講演会となりました。

文責 静岡県支部長 中村幸広 (50教大教)

## 奈良

### 空が青いから白をえらんだのです

〜奈良少年刑務所涵養プログラムより

講師 寮 美千子氏 (作家)

7月2日(土) 春日野荘



奈良支部では昨年度より支部活動の活性化を目的とし、外部から講師を招き、支部総会終了後に講演会を実施しております。本年度は泉鏡花文学賞受賞作家 寮 美千子氏の講演会を行いました。

寮 美千子氏は、2005年初めて大人を主人公とした長編小説『楽園の鳥 カルカッタ幻想曲』(講談社)で泉鏡花文学賞を受賞されました。2006年、奈良に移住されてからは、奈良少年刑務所で受刑者の更生教育に携わり、『空が青いから白をえらんだのです 奈良少年刑務所詩集』(長崎出版)を編纂されました。この活動が新聞等で報道され、大きな反響を呼びました。現在、執筆活動はもちろん、講演会等に多忙を極められておられます。このたび、寮氏と交流のある支部会員の方からご紹介いただき、講演会をお願いすることができました。

奈良への移住後、寮氏と奈良少年刑務所との出会いは、煉瓦作りの建物の美しさに惹かれ、訪問されたことがきっかけでした。刑務官のかたと言葉を交わすうちに、教育プログラム(社会性涵養プログラム)への参加を打診されたようです。当初、受刑者に対する偏見(恐れや恐怖)からさすがの寮氏も尻込みされたようですが、意を決し、詩の指導による受刑者の更生教育に携わるようになられました。ところが、取組を始めると太陽が大地の雪を溶かすが如く、彼らに対する偏見が消えていったよ



動」であり、「彼らのやわらかな心、やさしさや苦悩を素直に表現できるようにしてやりたい。」と表現されました。

講演会では詩を朗読されながら、ダイナミックに変化していく子どもたちの様子を、ユーモアを交えながら紹介していただきました。参加しているわたしたちも時間が経つのを忘れ、寮ワールドに引き込まれていくと同時に、偏見も消えていくのを感じました。

本のタイトルにもなっている「空が青いから白をえらんだのです」という詩を書いたAくんのお話には特に心を打たれました。普段はあまりものを言わないAくんがこの詩を朗読したとたん、堰を切ったように心の内を語り出したようです。紙面の関係で詳しくご紹介することができず残念です。一度本を手に入れていただければと思います。

講演会の実施は確実に支部の活性化につながっています。茗溪会の公益事業に対する援助には感謝しております。

文責 奈良支部 井上徳之(58筑一自)

## 愛媛

### ビーチで見つけた可能性

講師 徳野 涼子氏(09筑体)

元オリンピック選手/  
ビーチライフコーディネーター  
7月2日(土)にぎたつ荘



愛媛支部では、毎年7月初旬に、日本最古の温泉として有名な道後温泉から徒歩5分の場所にある「にぎたつ会館」で支部総会を開催しています。出席者の平均年齢が年々上がっていることが悩みの種ではありますが、会員は皆、年に1度の集いを楽しみに、和気藹々と茗溪の絆を深めています。

本支部では、平成19年度から支部総会の折に、郷土の歴史、環境、俳句、スポーツなど多岐に渡る分野の講師をお招きして「茗溪文化講演会(公開)」を開催して好評を得ています。平成23年度は、本学卒業生(平成9年卒)でビーチバレー日本代表としてアテネオリンピックに出場した徳野涼子さんを講師にお招きし、「ビーチで見つけた可能性」というテーマで講演をしていただきました。

講演では、ビーチバレー選手として、世界の長身選手を相手に低身長というハンディを、努力に努力を重ねて克服し、オリンピック出場を果たす話や、当時はビーチバレーという競技が世間での認知度が低いマイナー競技だったために直面した苦労話など、現役時代の貴重な経験談を、元オリンピック選手ならではの視点からお話しいただきました。また、オリンピック終了後は、現役時代に世界各国の美しく整備されたビーチ(砂浜)や、ビーチを生活の一部として楽しく生きている人々を目にした経験から、日本でも海外に負けないビーチ環境を整備して、ビーチ文化を創造したいという思いを強くし、一念発起、筑波大学大学院に進まれ、関連分野の研究に没頭されたそうです。そして現在は、「ビーチライフコーディネーター」として、講演会やスポーツを活用した地域活

性化についての啓発活動などに活躍中で、その様子なども紹介していただきました。

また、徳野さんは一児の母としても子育てに奮闘中で、11月には2人目の出産を控えているとのこと。

講演に参加した会員一同、彼女のみなぎるパワーとバイタリティーに感銘を受け、「元気をいただいたように思います。」

こうした公益事業開催時には、毎年本部から諸経費の一部を補助していただいております。大変助かっています。



業を展開して参りたいと考えています。

文責 愛媛支部 辻岡英幸(03筑体)

## 山梨

### 教養講演会

12月3日(土) KKRニュー芙蓉

茗溪会山梨支部(森屋政文支部長)では、平成23年12月3日(土)に甲府のKKRニュー芙蓉において恒例の教養講演会を開催しました。今回は前支部長である市村一司先生の甲府一高、東京教育大からの旧来の親友である清水一彦先生(筑波大副学長)と守屋正彦先生(筑波大教授)の2名の先生を迎え、清水一彦先生には「筑波大学の新しい挑戦! Imagine the Future」、守屋正彦先生には「茗溪・筑波大学の故郷《湯島聖堂》、その内陣の復元研究」の演題でそれぞれ講演をしていただきました。当日は、本部からは高野力理事にも出席していただき、50名弱で両先生の講演を聴くことができました。

## 茗溪・筑波大学の故郷

《湯島聖堂》、その内陣の復元研究

講師 守屋 正彦氏（筑波大学教授）



最初に守屋先生より、茗溪の生い立ちについて講演をしていただきました。

\*

「湯島」の地は近代教育発祥の地です。明治新政府になって江戸時代の幕府教学の中心であった湯島聖堂と昌平坂学問所は閉鎖され、学問所は昌平学校となり、明治3年に大学本校（現、東京大学）が設置され、さらに学問所の校地に師範学校（現、筑波大学）が開校しました。茗溪の創基です。筑波大学と財団法人斯文会は孔子祭復活百周年記念事業として「草創期の湯島聖堂―よみがえる江戸の《学習》空間―」を平成19年10月25日に、東京都文京区の湯島聖堂大成殿で開催しました。これは三度も高等師範学校の校長を務めた嘉納治五郎が1907年孔子祭を復活させて以来百周年の節目でありました。嘉納は孔子の「道徳」の教えを崇敬し、「柔術」に道徳を採り入れ「柔道」に改めたり、体育教育の新しい仕組みを実践しました。

## 筑波大学の新しい挑戦！

Imagine the Future

講師 清水 一彦氏（筑波大学副学長）

続いて清水先生に筑波大学の未来について講演をしていただきました。

\*

冒頭、東日本大震災に触れられました。筑波大学の総合体育館も被害を受け、今年度の入学式を陸上競技場で行いました。授業も学長の「大学の使命は教育である」との掛け声の下で、例年どおりスタートさせました。震災被害の悲しみや心の痛みをしつかりと受けとめながらも、明日に向かって踏み出そうとする姿と勇気を「なでしこジャパンの

2名の筑波大学出身者」がワールドカップ初優勝で日本中に与え、今まさに未来を開いて行く筑波大学に相応しい大活躍をしました。

Imagine the Future.を旗印に、140年の歴史と伝統を踏

まえ、「未来構想大学」というスローガンを掲げた、多岐にわたる斬新な教学改革を紹介していただきました。

お二人の先生に茗溪の創基から未来に向けて講演していただき、「湯島」から「筑波」に変遷してもコミュニケーション良く、茗溪のDNAが筑波大学に継承されていることを強く感じることができました。また、質疑応答では甲府一高時代の恩師が清水先生に辛辣な質問をして雰囲気や和んだり、その後の懇親会でも同じく甲府一高時代に応援団長であった守屋先生の、気迫のこもった応援エールで会を締めくくするなど、茗溪の同窓らしい老若男女の多世代が親交を深めたアットホームな会を過ごすことができました。

文責 山梨支部事務局長 平賀国康（05筑修体）

## 葛飾

### 食生活力の向上について

シンポジウム 白尾 美佳（実践女子短大教授）

小田 泰夫（自由学園常務理事）

徳田 安伸（都立椚ヶ丘高校長）

進行 渡邊 悟（東京聖栄大学教授）

3月4日（日）茗溪会館

平成24年3月4日（日）に茗溪会館において本部支援のもと、葛飾支部主催の勉強会を今年も行うことができました。人数は相変わらず十名ほどであったが、実践に基づいた事例が多数紹介されて大変有意義なものとなった。

まず実践女子短大の白尾美佳教授より「若年女性における食生活の実態」と題し、アンケート調査結果をもとにした二十代女性の食生活の現況について考察を交えて発表していただいた。続いて自由学園の小田泰夫常務理事より「自由学園における食の一貫教育」について、生活即教育をモットーとしている自由学園の「食の学び」が紹介され、理想的とも言える「食育」の実践活動を知

ることができた。

そして都立椚ヶ丘高校の徳田安伸校長（前都立農産高校長）より「食生活の向上を目指して」と題し、「食育」の課題や発達段階における「食生活力」を解説いただき、「食生活力」をつける方策のヒントを提示していただいた。

最近の特に若者における食生活の乱れは、経済的に苦しいことと相まって目に余るものがある。自由学園のように、一堂に会して毎食食べる人たちのことを考えたメニューを提供できればよいが、個々人の多様化した食生活を向上させるには、画一化したものではなかなか有効な方策が下せないのが現状である。まずは家庭で、学校現場で、それぞれの社会で、発達段階に応じて、食生活を共有することが重要であろう。見本を見せて実践させることにより、「食生活力」が向上していくわけで、その機会を増やす取り組みが社会全体に求められるのではないだろうか。

茗溪会からの多大なご支援と、参加いただいた田中常務理事と堀内理事に、厚く御礼申し上げます。

文責 葛飾支部長 渡邊 悟（62筑博農）



シンポジスト  
左から徳田安伸、小田泰夫、白尾美佳の各氏



# 茗溪会の公開講座から

本部主催の連続講座

連続講座 「初心者のための朗読入門」

## 人と人を結ぶ朗読の楽しみ

講師 小川道子

平成23年10月・24年3月(10回)  
会場/東京・茗溪会館



茗溪会主催の連続講座「初心者のための朗読入門」は平成23年10月18日(火)から半年間にわたって、隔週火曜日の夜6時半から8時半までの日程で計10回開催されました。約3倍の希望者から抽選で25名が受講しました。事務局では受講者の毎回の感想文を冊子にして発行、記念品として修了式で全員にお渡ししました。講座を振り返って、講師の小川先生から次のようなご感想をいただきましたので掲載します。

\* 連続講座の最終日。10回を通いとおした21人の受講生の皆さんが修了に当たって山本有三作「ふしやくしんみよう(不借身命)」を発表しました。

20分足らずの作品を場面転換にあわせ8つにわけ、冒頭と最後の部分は同じ人がやることにして7人でひとつの作品を違和感なく伝えられるように。作品が始まったら、自分のところばかり見ているのではなく、ちゃんと前の人の朗読を聴いて作品の世界をいっしょに進んできて、表現してくださいと伝えてありますが、大丈夫かな。

3グループ最後の7人が、発表を前にして神秘的な面持ちで朗読席に座りました。最終回には、他の受講生は聴き手になり、担当理事の方数人と事務局の方にもお客として聴いていただくなかで、前に出て発表してもらおうとにしています。「本番」一回の緊張を体験し、理解し味

わっただけだけのことが表現できたか、あるいは表現できなかつたかを感じてもらいたいからです。そして、どの人もいい意味で気合の入った真剣な朗読を聞いて講座を締めくくるとこの時間が、名残惜しくもあります。

発表が終わりました。拍手を受け、緊張が解かれた安堵感とある種の充足感で皆よい顔をしています。修了証書が手渡され、講座を終えての感想を、一人ひとりが飾らない自分のしゃべりで見事にスピーチしました。そして散会後は、別れがたい気持が伝わる挨拶があちこちで交わされていきました。

昨年に引き続き「初心者のための朗読入門」を半年にわたってやりましたが、受講生は広範囲からいろいろな立場、目的で集まります。夜の講座ですから、仕事先から駆けつける方もいます。今回は特に図書館、文庫、児童館、小学校などでの読み聞かせ、ボランティア朗読の経験者や、心を傾けて相手の胸のうちを聴くという傾聴ボランティア、保育の場や看護職として言葉を通して深く人に関わる仕事をしたいらっしゃる方も多く、初心者というより自分の言葉との関わりかたを振り返りながら勉強しようという意欲が感じられました。

こうした皆さんに、わずか10回で何を学んでいたかどうか。書いてある文字を「声に出して読む」ことならことさら学ぶことはないでしょう。私は、朗読者はレポーターだと考えています。例えば事件を取材し、事件の全貌と取材によって自分が感じたことも同時に報告する、あ



のレポーターです。他人が書いた文章を正しく理解し、内容とともにその文章にこめられた作者の気持ちと、その文章から感じた自分自身の思いも同時に伝えるのが朗読者。伝える内容が深刻なら、声は自ずと真剣みを帯びるでしょうし、愉快な内容なら口調も軽快になるし声も明るくなるでしょう。どう報告するかが先にあるのでなく、中身が表現を決めるのです。的確な表現は理解に支えられ、さらに表現によって理解は深められます。

現場(作品)そのものにしつかり向き合い、自分の目で見(文章をしつかり読み取り)、見えないものは(書かれていない行間は)想像力でつかまなければなりません。いやおうなく自分の取材力、想像力のキャパシティーが問われます。ひとりよがりではなく誠実に伝えようとすれば、人間の営み、社会の動きに鈍感ではいられなくなります。柔軟に元気に飛び回れなければ、心が動かなければよい取材はできないでしょう。朗読の技術的なことは今回の入門講座ではわずかしかできませんでしたが、受講生同士が、なんだか元気で仲良くなったようすをみると、音声表現としての朗読がどういうものかをきちんと受け止めてくださったかなと思います。

朗読の勉強を通して、今までより生活のなかにあふれている言葉に意識的に暮らし、いろいろな場面で声に込められたより多くのものに気づけるとよいなと思います。そのことは、人との関係になにかしら変化を与えるかもしれません。他人の書いた文章に丁寧に関わることは、そのまま人と人との関係に通じることだと思います。実社会ではできないこと、経験できないことを「表現」することで追体験し、行けない場所に旅をし、想像力を駆使してその世界に遊ぶことはなかなか楽しいことです。「朗読」と言う音声表現の世界を、ともに楽しむ仲間が増えたら、こんなうれいこととはありません。

# 茗溪会は 一般社団法人として 新発足しました

平成24年4月1日

社団法人茗溪会は、公益法人制度改革に伴い、新しい法人形態として一般社団法人を選択し内閣府へ申請しました。このほど認可され、4月1日をもって一般社団法人茗溪会に移行することになり、すでに昨年度通常総会で承認された新定款がこの日をもって発効することとなりました。

一般社団法人に移行して第一回となる平成24年度定時総会を、左記の通り開催します。総会では、申請・認可等の経過をご報告し、今年度の新役員等を提案、審議します。

なお、新法人の定款によりまずと、総会は法人法上の「社員総会」として毎年5月に定時総会を開催することとなっております。「総会はすべての社員をもって構成する」としており、社員とは、各支部長を経て全国から選出された代議員のことです。

## 一般社団法人 茗溪会(第一回) 平成24年度 定時総会開催のご案内

日時 平成24年5月24日(木) 午後2時から  
場所 茗溪会館二階「茗溪」の間  
議題

平成24年度事業計画および予算等の審議、  
新法人移行に関する報告、新役員を選任、その他を予定します。  
また、総会終了後、出席者の懇談会を予定しております。

## 平成24年度 一般社団法人茗溪会 代 議 員 一 覧

推薦支部	姓 名	卒年	卒科・群	推薦支部	姓 名	卒年	卒科・群	推薦支部	姓 名	卒年	卒科・群
筑波大	大澤 義明	昭62	筑博社工	千 葉	瀧澤 文雄	昭52	院修体	富 山	伊藤 義秋	昭52	教大哲
筑波大	坪内 孝司	昭63	筑博工	千 葉	佐藤 幸	昭57	筑二人間	石 川	久下 恭功	昭49	教大体
附属校	日下部公昭	昭52	教大東史	足 立	田原 章孝	昭51	教大応数	福 井	西川 讓	昭51	教大武
函情橘会	森 茜	昭40	函短特養	江 戸	川 奈良 隆	昭53	筑体	静 岡	伊藤 宏	昭48	院修体
函情橘会	遠藤 茂樹	昭51	函短特養	大 田	桑原 洋	昭51	教大英	静 岡	中村 幸広	昭50	教大数
函情橘会	大場 高志	昭51	函短特養	葛 飾	渡邊 <sup>(草間)</sup> 悟	昭62	筑博農	静 岡	杉本 淳光	昭52	教大経
函情橘会	柿沼 澄男	昭54	函短特養	北	村松 広英	昭57	筑一社会	静 岡	松井 和子	昭54	筑体
函情橘会	寺沢 白雄	昭63	函大函情	江 東	浦部 利明	昭58	筑修教	愛 知	鳥山 勇	昭48	教大数
函情橘会	城谷 浩	昭60	函大函情	江 品	川 栗野 友樹	平17	筑修体	愛 知	高須 勝行	昭51	教大哲
函情橘会	茂出木理子	昭61	函大函情	渋 谷	竹村 恭一	昭56	筑一自	愛 知	林 誉樹	昭53	教大木工
北海道	沖野 隼夫	昭41	教大体	新 宿	浅井 一郎	昭55	筑一人文	岐 阜	丹羽 章	昭53	教大農
北海道	大沼 寛	昭47	教大武	世 田	谷 柳 久美子	昭50	教大体	滋 賀	豊田 則成	平13	筑博体
青 森	遠藤 智久	昭51	教大農経	中 央	中村 穎司	昭35	教大國	三 重	寺田 卓二	昭52	院修植
岩 手	高橋 光彦	昭50	教大健	豊 島	醍醐 路子	昭50	教大言	京 都	塩見 均	昭47	教大数
宮 城	河岸 敏郎	昭49	教大武	中 野	谷島 昭	昭51	教大法政	大 阪	新堂 庄二	昭24	理四、25研
秋 田	船木 賢咲	昭49	教大武	練 馬	西塚 春義	昭53	筑体	大 阪	佐藤 隆一	昭26	文二、27研
山 形	小野 庄士	昭51	教大植	港	及川 良一	昭52	教大倫	兵 庫	折戸 善信	昭45	教大体
福 島	鈴木 弘文	昭46	教大米文	目 黒	高橋 基之	昭53	筑一自	兵 庫	向田 茂	昭49	教大日史
福 島	末永 仁	昭57	筑二農	北多摩北	榎本 善紀	昭50	教大國	兵 庫	藤善 尚憲	昭33	教大教
茨 城	河原井忠男	昭45	教大経	北多摩北	守屋 一幸	昭52	教大漢	和 歌	山 高田 晴美	昭50	教大心
茨 城	市村 博	昭50	教大数	北多摩南	初見 豊	昭52	教大農	鳥 取	有田 博充	昭41	教大教
茨 城	早川 源一	昭51	教大東史	西 多 摩	小林三代次	昭51	教大英	鳥 島	根 松本 弘光	昭46	教大体
茨 城	大沢 修	昭51	教大教	八 王 子	小島 和雄	昭44	院修農化	岡 山	平田 信彦	昭43	教大國
茨 城	武井 秀一	昭51	教大化	町 田	角田 展子	平04	筑修教	広 島	大辻 明	昭47	教大体
茨 城	原田 茂樹	昭53	筑一社会	神 奈 川	嵐 實	昭29	教大農化	山 口	鍋井 邦久	昭38	教大体
栃 木	田島 一利	昭46	教大倫	神 奈 川	小山 和夫	昭33	教大教	德 島	木村 潤	昭46	教大國
栃 木	上岡 利夫	昭53	筑一自	神 奈 川	京野 勝	昭40	教大農化	香 川	堀家 俊一	昭51	教大健
群 馬	茂木 道弘	昭50	教大数	神 奈 川	佐々木悦子	昭46	教大体	愛 媛	藤井 俊夫	昭51	教大応数
群 馬	佐藤 功	昭55	筑一自	神 奈 川	本木 幹雄	昭50	教大健	高 知	下坂 速人	昭53	筑体
埼 玉	荒井 修二	昭25	理三	神 奈 川	矢野 正人	昭53	院修農経	福 岡	柴田 晴夫	昭51	教大武
埼 玉	相澤 鎮夫	昭27	理三	神 奈 川	加藤 充洋	昭56	筑一社会	福 佐	賀 東島 敏隆	昭49	教大体
埼 玉	奥谷 多作	昭34	教大工芸	山 梨	森屋 政文	昭52	院修農	長 崎	崎 浦下 悦二	昭50	教大武
埼 玉	矢嶋 章司	昭35	教大体	長 野	佐藤 宏	昭46	教大生化	熊 本	秀島 史孝	昭49	教大武
埼 玉	細田 幸一	昭50	教大独	長 野	高橋 涉	昭51	院修英	大 宮	鈴木 基史	昭51	教大武
千 葉	川名 博志	昭46	教大教	長 野	安藤 善二	昭50	教大体	宮 崎	児玉 洋一	平02	筑三社工
千 葉	黒須 健治	昭47	教大応数	新 潟	瀧 永井 成一	昭41	教大法政	鹿 児 島	篠原 良司	昭52	教大國
千 葉	青木 寛	昭48	教大武	新 潟	瀧 小野寺 篤	昭51	教大体				

## 公益、共益、広報事業等の 年間計画について

平成24年4月1日

### 1 公益事業

#### (1) 公開講座

対象 一般社会人（学生、生徒等を含む）

会場 東京地区―茗溪会館

筑波地区―筑波大学会館、財団・研修センター

両地区会場で、それぞれにテーマを設定する。

講師 筑波大学教員、茗溪会理事、外部有識者等に  
講師を委嘱する。開催は、それぞれ年2回程度  
を予定する。

つくば地区開催の場合は、筑波大学や地区の県・  
市当局及び関係の教育委員会等の後援、筑波学都資  
金財団、紫峰会等の協賛を得る。

#### (2) 顕彰

推薦候補対象 社会貢献活動功労者 一般社会人

（個人、または団体等）を候補対象とし、特に青少年  
を顕彰対象として発掘する。本年度11回目です。

#### (3) 学生活動への支援事業

学生等が行うサークル活動や生活等への支援、社  
会貢献活動への助成等を行う。

#### (4) 大学・周辺地域への支援

筑波大学、つくば市およびその他の地域、あるい  
は中学高校等で行う講演会の開催等への共催、協賛、  
協力、支援等を行う。

#### (5) 後援、協賛、協力等

対象 本会会員が所属する地域、職域での活動や  
関連団体、学校等が開催する公益事業等に対して行う。

### 2 共益事業

#### (1) キャリア情報等の講座

対象 筑波大学卒業予定者のうち、就職希望者、  
卒業後転職希望者等とする。

- ① 9月～3月の期間に8回程度実施、講師の委嘱。  
資金財団と共催、筑波大学の協賛を得る。
- ② 3月中の3～4日間で研修講座を企画、実施す  
る。筑波大学、資金財団と共催する。
- (2) 現職教育研修講座  
対象 主に中高教職員  
テーマ 教育現場で当面する課題を討議、研修する。  
地域、職域に属する本会会員、グループ等と共催  
する。

#### (3) 追悼のつどい

日時 9月中旬予定

会場 東京・茗溪会館

本会会員のうち、逝去した会員の遺徳を偲んで遺  
族関係者等を招き、脱宗派で開催する。

#### (4) 学生への支援

筑波大学で行う学園祭（雙峰祭）、茗溪・筑波グラ  
ンドフェスティバル、学生宿舍祭（やどかり祭）、ホ  
ームカミングデイ、茗溪会賞（芸術作品）、学生賞等  
諸行事への共催、協賛、協力、支援を行う。

### 3 広報事業

#### (1) 出版物の発行（HPでのIT化の充実を含む）

季刊誌『茗溪』の発行

発行時期 春、夏、秋、正月の4回を予定する。

内容 本会会員をはじめ一般社会人をも対象にし  
た「特集記事」や筑波大学生を含めた会員に  
関係する記事を掲載する。

#### (2) 展示等による一般公開

筑波大学の研究成果や歴史的に永く蓄積、継承さ  
れた文物、また、会員を含む大学関係者が制作した  
優れた作品、取得された世界的なレベルのもの、ノ  
ーベル賞や世界規模の体育競技での顕彰物や関連す  
る人物の業績等々を展示して積極的に広報する。

#### (3) 展示等の公開施設の常設化への計画準備

右記(2)での内容を常時展示公開、研究できるスベ  
ース（東京、筑波等）の特定化を進めるための計画  
準備を始める。

## 第11回「顕彰」候補者の 推薦依頼について

茗溪会が主催する顕彰事業は、茗溪創基130周年を記念  
して始められた公益事業です。平成24年には第11回を迎え  
ます。

顕彰対象は、地域社会にあって広く社会に貢献している  
青少年や一般社会人とします。今回も、顕彰候補者を広く  
全国的な視野から積極的に発掘し、右の要領により推薦し  
てください。ただし、公益事業としての趣旨から、政治家、  
現職の公務員等を避けるほか、現在、本会の役職にある者  
は対象外とします。なお、本会会員であっても、その社会  
貢献の実績が社会的に評価されている場合は候補の対象か  
ら除かないものとします。

また、社会的客観性を高めるためにも、当該地の教育委  
員会、新聞社（支局等を含む）、放送局あるいは関係団体、  
有識者、本会会員からの提案、参考意見等を積極的に求め  
てください。

- (1) 顕彰対象 社会貢献活動功労者  
一般社会人（個人または団体等）を対象とする。  
特に青少年の活動に注目して積極的に推薦されたい。
- (2) 推薦 全国の代議員および本部理事等から候補者  
を推薦する。推薦にあたっては、世代、地域、職域等に  
こだわらず、全国的な広い視野から、候補者を推薦され  
たい。
- (3) 選考 推薦された候補者の中から選考会議におい  
て顕彰対象者を選考する。選考会議は当該担当の副理事  
長を座長とし、内（各委員長）外（理事長が委嘱した有  
識者）の関係者により構成する。
- (4) 推薦締切 候補者の推薦締切は平成24年9月末日とし、  
関係書類を本部事務局へ提出する。
- (5) 顕彰式等 顕彰者を本部に招いて、顕彰式、祝賀会を  
行い、顕彰録を作成して関係者に贈呈する。  
また、顕彰者の社会貢献活動の概要や横顔等を、季刊誌  
『茗溪』に掲載し、広報・周知する。

新法人移行にともなう

## 茗溪会「支部」の呼称について

この新年度から、社団法人茗溪会は新たに「一般社団法人茗溪会」としてスタートしました。新法人の定款では、全国各地あるいは職域での『支部』についての定義はありません。内閣府の見解によれば、『一般社団法人茗溪会○○支部』という呼称は、あたかも法人の下部組織であり、拘束性をもつような表現であるところから、平成20年12月1日施行の公益法人関連三法にはなじまないと考えたからです。

従って従来の『支部』は、法的には任意団体であり、活動内容も本部と綿密な連携を図りながらも、自主的な活動が展開されていくこととなります。

このことから、呼称については、例えば「茗溪会○○支部」あるいは「○○茗溪会」と呼ぶこと等、くふうしてください。

なお、本部としては、各代表者(会長等)を「支部長」という呼称を従来どおり使うことと致します。

このように、法的には支部と法人との関係には変化がありますが、地域・職域等での単位組織の活動は、今後とも茗溪会を支える重要な活動であると位置づけています。

一般社団法人 茗溪会

# 会費は、社会人になって4年目から

## 茗溪会の新しい会費制度

入会金は  
ありません

在学中と  
卒業(院修了)後  
3年間は  
会費不要です

- ◆年会費 3,500円
- ◆年会費を35回納入すれば、会費納入義務は終了
- ◆会費優遇制度
  - 入金なし 入会の時、入会金はありません。
  - 会費納入猶予 在学中および大学卒業(院修了)後3年間は会費納入は不要です。
  - 一括納入割引 25回分(3,500円×25回)を一括納入すれば会費納入義務は終了です。10回分が割引となります。
  - 学生割引会費 1,000円  
在学中は会費不要ですが、納入すれば35回の回数にカウントされるので、お得です。

## 会費納入のしかた

**現在すでに会員である方** 卒業後4年目から会費請求をします。学生会員として既にお支払いいただいた会費は、そのまま回数としてカウントされますので生かされます。大学院の方は修了または修了予定年月をご連絡下さい。

**卒業後3年未満で新入会する方** 今すぐ入会を受付けます。卒業後3年間までは会費納入は必要ありません。季刊誌『茗溪』等をお送りします。

**新入生、在学生の方** 学生も入会できます。季刊誌『茗溪』等をお届けします。卒業後3年間は会費納入は不要です。ただし、学生会費不要ですが、学生会費1,000円で会費納入すれば回数にカウントしますのでお得です。

- ◆年会費の請求は毎年6月と12月に行っています。
- ◆会費払い込み方法
  - (1) 郵便局から払込取扱票により払い込む。(払込手数料無料)
  - (2) 他の銀行からの振り込みは(振込手数料はご負担下さい)  
記号 00150 番号 004977  
宛先銀行名 ゆうちょ銀行  
金融機関コード 9900 店番 019  
店名(カナ) 〇一九(ゼロイチキョウ店) 預金種目(当座)  
受取人名 イッパンシャダンホウジン メイケイカイ  
(一般社団法人 茗溪会)
- 通信欄又は送付者名欄に**会員番号等**を必ず書き添えて下さい。

## お願い

大学関係者や茗溪会本部関係者の努力にも関わらず、年ごとに新入会員の加入率の低下傾向が見られます。また、新定款では、会費収入の50%は共益活動に使用しなければならないと決められるなど、いっそう財政が逼迫してまいりました。そこで、上記のように、新しい卒業生が少しでも入会しやすいうように「新しい会費制度」に改訂しました。また、会費完納者の先輩方にも、「賛助・寄付金」の納入という方法でのご協力をこれまで以上にお願いしたいと思います。

多くの完納者の方々の声として、「他の団体でも行っているように、賛助寄付金を、終身にわたって納入する制度としてはどうか」というご意見や、また、「卒業生、同窓生を取りまく外部の理解者を“後援会員”として組織化し、一定の経費助成をお願いしてはどうか」という意見が寄せられております。

皆さまの声を十分に参考にさせていただき、そのご好意のまなざしへお返しをする方策も同時に考えながら、熟慮を重ね提案したいと思っております。どうかお力を貸して下さい。

広報担当

平成23年度

# 筑波大学芸術賞、茗溪会賞決まる

23年度の筑波大学芸術賞および茗溪会賞の両賞が、左表のように決まりました。これは、筑波大学芸術専門学群、並びに大学院人間総合科学研究科博士前期課程芸術専攻で、毎年度の卒業研究および修了研究の中から特に優れたものを選択し、筑波大学芸術賞および茗溪会賞の両賞を授与して表彰しているものです。

両賞の受賞作品等は、3月の卒業式修了式の時期に芸術学系棟ギャラリーで開催された「筑波大学芸術賞・茗溪会賞受賞展」において展示公開しました。本誌では茗溪会賞受賞作品について、次のコメントをいただきましたので掲載します。

グラビアページを参照。

## 『つくば俯瞰図』の制作意図

芸術専門学群 清水 総二



これは追越宿舎から外国語センター、大学会館あたりまでを南東の方角より見おろす俯瞰図です。僕は絵を描くときに大抵にしているものが二つあります。一つは、対象と自分の「距離感」です。例えば、実際に対象を目の前に置くのではなく、対象の写

真を用いることで二者の間に一層のフィルターがかかり肉眼で見えて描くことと、一度機械的に二次元に変換されたものを見て描くことではまったく意味が違ってくるのです。また、どのような写真

を利用するかによっても意味合いが変わり、同時に自分と対象との距離感も変わると考えています。もう一つは、対象や素材の選択から生まれる「ストーリー」です。この『つくば俯瞰図』の場合、僕にとつてまったく見覚えのない客観的で正確な衛星写真からスタートしています。その上に、僕自身の4年間の記憶、イメージを重ねました。毎日往復した道には自然と手が入り、3ヶ月間住んだ追越宿舎23号棟は黒ずまざるをえませんでした。そういった制作のプロセスにストーリーや意味を与え、いくつかの素材と描画によって一枚の画面をつくっています。問題は、そんなプロセスやストーリーは見る人にとつてまったく関係がないということです。そういった問題を超越する完成度を獲得することが今後の課題です。

## 試行錯誤から生まれるもの

人間総合科学研究科 樋口 健介



画面の絵肌と描くモチーフの関係を探りながら、試行錯誤の中で制作しています。アクリル絵具を中心とし、さまざまな画材や素材を組み合わせて、魅力ある絵肌を作りたいと考えています。また、作品からさまざまな想像が膨らむように組み合わせを考えながらモチーフを選択しています。修了制作作品の「麒麟を喰らう象」では、草食動物である象が麒麟を食べてしまうのはどんな時だろうと想像しながら制作しました。象の曲線的な形と檻などの直線の強弱を意識して、広がりのある画面を目指しました。昨年は東日本大震災が起こったこともあり、なんの役にも立たない絵を制作し続けることに意味はあるのか、と疑問を持ち悩むこともありましたが、今できることや、今しかできないことを改めて考えるきっかけとなったと思います。多くのことから取って目をそむけ、自己の内面を見つめようとした大学院での二年間で、これまで学んだことを使い、いかに社会と関わりながら作品を作り続ける事ができるかがこれからの課題であると考えます。この度、茗溪会賞を頂いたことはこれからの大きな励みになると思います。本当にありがとうございます。

## 紙の可能性

芸術専門学群 内藤 遥



卒業制作作品「paper ∞ IV」は、紙でしかできない表現を追究することで、造形素材としてネガティブなイメージを持たれがちな「紙」という素材の価値を見直したいという意図で制作しました。あらゆるものがデジタル化する社会のなかで、紙という素材は、記録媒体以外の用途として多方面に利用されています。特に、芸術という需要に左右されない分野において、紙は大きな可能性を秘めています。紙は日本で古くから親しまれてきたものです。紙

## 筑波大学芸術賞

(芸術専門学群)

- 『かたち』(木彫/彫塑) 石田亜依子
- 『広島市の被ばく樹木に関する研究～生きる戦争遺産としての現状とこれからのあり方について～』(論文/環境デザイン) 大脇なぎさ

(博士前期課程芸術専攻)

- 『赤い上着の男』(木彫/彫塑) 渡部 直
- 『美術館における市民の主体的な活動について—横須賀美術館「プロジェクトボランティア」の先駆的な事例をもとに—』(論文/芸術支援) 新井 貴子

## 茗溪会賞(グラビアページに写真掲載)

(芸術専門学群)

- 『つくば俯瞰図』(油彩/洋画) 清水 総二
- 『paper ∞ IV』(紙立体/構成) 内藤 遥
- 『麒麟を喰らう象』(油彩・アクリル/洋画) 樋口 健介

# 茗溪学園だより

## SS研究・個人課題研究発表会

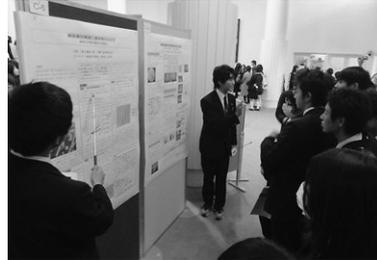
第4回平成23年度個人課題研究発表会は、スーパースイェンスハイスクール（SSH）として行うSS研究発表会との合同開催となり、2月1日筑波大学・大学会館を会場に催されました。なお本発表会は、SS研究部分が理系の研究となることから、個人課題研究部分は文系研究センターとなりました。

前年までは口頭発表のみでしたが、今回はポスター発表を加え、高校2年生の優秀研究から30名（SS研究16、個人課題研究14）、科学部生物班と物理班、中学1年生の研究、SSHプログラムからアメリカでの調査研究活動報告を含む4テーマの発表が行われました。

口頭発表は、SS研究を4分科会16名、個人課題研究を3分科会12名、計28名が行いました。それぞれの分科会には、筑波大学の先生方が座長としてご出席くださりご指導を賜りました。発表した生徒達の研究分野は、理系では医学や生物学の分野が多く、文系では文学、社会学や教育学分野の研究でした。いくつかのテーマを紹介しますと、「ロボットの開発と設計〜マイクロナウスの製作とプログラミング〜」、「極地から探る気候変動〜古環境と海洋大循環がもたらす影響とは〜」、「宇宙アサガオの変異とゲンジボタルの遺伝子解



口頭発表・個人課題研究(文系)



ポスター発表

析〜アサガオの突然変異と地域固有性ホタルの研究〜」、「制御性T細胞に着目した乾癬の效果的治療〜自己免疫疾患の治療と制御性T細胞の臨床応用の可能性〜」、「シベリア抑留からみる戦後補償のあり方」、「和歌からみる『月』とその形象性」、「落語で育む国語の力」などです。

発表会の最後は全体会でした。SSHプログラムとして行った、科学部生物班のゲンジボタルの研究成果発表や米国の調査活動の報告が行われ、締めくくりは筑波大学副学長清水一彦先生から、ご講評を交えてのご講演をいただきました。当日の会場は、全国のSSH校の先生方や保護者ほか一般の方々の来場者で賑わいました。発表者となった生徒達も、緊張しながらも物怖じせず、しっかりとした口調で発表をしていました。



米国調査研究チーム報告・パワーポイント日本語で作成、発表はすべて英語で行われた



口頭発表・SS研究(理系)

SSH・WSZ  
冬休み直前の3日間を「Winter Study Zone」と銘うって各学年ごとにSSH活動を行いました。中学1年では、歩いて行ける近くに環境研究所、気象研究所、産業総合研究所があり、学年を3分割して2日間をかけてそれぞれの研究施設を見学し研究概要などについて解説や講義を受けました。中学2年は、科学体験講座として2日間で13講座を開設し、生徒はそれぞれが選んだ講座で実験などを行いま

した。産業総合研究所、食品総合研究所、建築研究所、JAXA、千葉工業大学などから30名近くの研究者の皆様のご協力をいただきました。

中学3年は、SS・ITC（情報の授業で行っている映像制作）発表会と国内研修旅行でのテーマ研修をパワーポイントにまとめて発表する活動を行いました。映像制作のテーマは、理科実験の授業で行っている実験を解説する映像を作ることでした。それぞれの発表には、グループメンバーのアイデアが生かされ、パワーポイントによるテーマ研修のプレゼンにも、工夫と協力して制作に当たった様子が感じられました。

高校1年は、SS Lab Tourとして、近隣でも歩いて行くには遠い、高エネルギー研究所、土木研究所、地磁気研究所、国土地理院、ツムラ漢方記念館、柴沼醤油、日立建機、ハザマ技術研究所などの研究施設から6コースの組み合わせを作り希望のコースを見学しました。高校2年は、筑波大学で行われるSS研究および個人課題研究発表会の選考も兼ねた全員発表会を行いました。この全員発表会には、例年筑波大発表会にはない活発な質疑応答があり、白熱した雰囲気を作り出していますが、今年も活気あふれる発表会となりました。



中学2年科学体験講座。この講座のテーマは「火山噴火の謎」



WSZ 3日目は全校講演会・沖大幹先生（東京大学生産技術研究所教授）演題「地球をめぐる水と水をめぐる人々」

## 第27回 教職受験対策研修会から

「研修会などのプログラムも様々な視点・考え方を学ぶことが出来る内容で、ためになりました。仲間の輪も広がりました。」(修士教育研究科 中学英語を受験予定) 「茗溪会が筑波大学の学生を支援して下さることは、非常にありがたいことです。」

採用試験に合格したら来年の研修会では後輩のためにサポートしたいと思います。」

(人文学類 高校地歴を受験予定) 「小論文の作成・読み合わせ・個別指導、個人面接・集団面接に加えて最近多くの県で教員採用試験に取り入れている集団討議の練習など全てにおいて学ぶことが多く、きめ細かい指導をしていただき大変ありがとうございました。」(看護学類 養護教諭を受験予定)

「これからの教員採用試験に向けてのモチベーションが高まりました。採用試験に向けて一緒に頑張っている仲間が、この会で出来て良かったです。」

(博士前期課程数学物理学研究科 高校物理を受験予定)

以上は研修会最終日に寄せられた感想文の一部である。

教職を希望する筑波大学生に対して、本会と財団法人筑波資金財団が主催する「教職受験対策研修会」が3月12日から14日までの三日間「筑波研修センター」で開催された。参加者は55名でした。

### 【第一日】

\*開講式には、茗溪会筑波大学支部長佐藤忍氏(60筑博生物)の出席していただき、田中正造事務局長(36健)も加わって、励ましの言葉や、いかに全国の教育関係者が筑波大学の卒業生に期待しているか等の話を伺った。

\*講義Ⅰ「教員採用試験の概要と受験対策」清水進一氏(43数学) 講義の内容は、最近

3年間の都道府県及び政令指定都市毎の各校種別、教科別の募集人員・受験人員・倍率等の詳細



清水進一氏



飯田國雄氏



浅野雄大さん



山下咲子さん



西本一彬さん



和田かおりさん



下村和裕さん

細な資料が紹介され、レジュメに基づき公立・私立の教員採用試験の概要と受験対策であった。

\*採用試験合格者体験発表(今年度の合格した先輩)

①茨城県 高校(英語)

下村 和裕さん

②岐阜県 高校(英語)

和田かおりさん

③東京都 中高(理科)

西本 一彬さん

④岐阜県 高校(英語)

山下 咲子さん

④神戸市 高校(英語)

(社会・国際学群) 浅野 雄大さん

(修士課程 教育研究科) \*論文作成および面接について事務局の担当・高原 将

が要点を説明した。

\*論文作成 90分で作成。

### 【第二日】

\*講義Ⅱ「我が国の教育の今日的な課題」

飯田國雄氏(42修東史)

教育基本法と教育三法の改正・学習指導要領の改訂・生徒指導上の諸問題・

学校評価等について日頃から集められている資料に基づき講義された。

\*個人面接 学生宿舎所長・高野大二郎氏(40体)、研修センター所長・飯村省一氏(地理)、それに高原が面接係となって実施した。

体験発表の5人のうち、和田かおりさんを除く4人がチューターとなり、受講生に個人面接の答え方等をアドバイスしてもらった。

\*集団面接 受講生数人のグループに対して集団面接の練習を実施した。

\*集団討論の実演 4人のチューターに明日実施する集団討論の実演を行ってもらった。(左上・写真参照)

### 【第三日】

\*集団討論 数人で用意されたテーマについて70分ほど討論した。まず、各人が与えられたテーマについて意見を述べ討論に入った。ほとんどの参加者が初めての経験であったが、議論が白熱し参加者からは良い体験であったとの声が聞かれた。

\*論文指導 初日に書いた論文を班ごとにわかれて、まず本人が音読し、意図するところや考えを述べ聞いて

いる参加者の意見を聞き、最後に指導者からのコメントを聞くという形式で実施した。参加者からは「大変役にたった」との声が多かった。

その後、閉講式を行い予定どおり研修会を終了した。

茗溪会事務局 高原 将 (38東史)

【各都道府県教育界の諸先輩にお願い】 各都道府県の採用試験情報や教育行政の最新情報について先輩方を訪ねて教えるように指導しています。教員志望の筑波大学生から、相談がありましたら論文の指導も含めて、ご指導のほど、よろしくお願ひ申し上げます。(研修担当)

### チューターによる

### 集団討論のデモンストレーション



### 熱心に講義を聞く受講生

